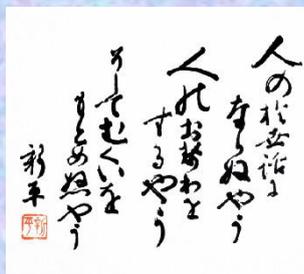




後藤新平記念館通信

奥州市立後藤新平記念館

R8年2月号



【自治三訣】

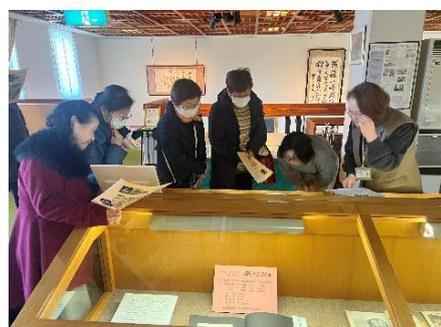


発見と創造



記念館はさまざまな人々が集まり、学び、楽しみ、考え、未来とつながる「発見と創造」の場です。この冬後藤新平記念館でも、当館の特色を生かした生涯学習支援の取組みを進めました。

企画展解説会



現在開催中の第3回企画展「ダンディー新平絵葉書になる～異国情緒と浪漫譚」の解説会が2月1日(日)に開催されました。寒い日が続く中でしたが、

熱心なお客様に足をお運びいただきました。学芸調査員の解説を聴いた方からは「とても色鮮やかな絵葉書があり驚いた。」「奥さまや家族に対する愛情が感じられる文面で、新平さんの人間味が感じられる。」という感想が聞かれました。今回の企画展は3月15日(日)まで開催しております。ぜひご来館下さい。



冬の3館ウォーク



児童生徒を対象とした「冬の3館ウォーク」が1月25日(日)で終了しました。3館ウォークは、高野長英・後藤新平・斎藤實の3先人の記念館

を回り、各館で問題に挑戦しオリジナルクリアファイルの獲得を目指す3館合同イベントです。今年の冬は例年より雪が多く、インフルエンザの流行もあり心配されましたが、最終的な挑戦者数は昨年とほぼ同数の422名でした。ご協力いただいた保護者、学校関係者の皆様ありがとうございました。



【学芸調査員コーナー】

《100年前》大正15(1926)年、「日独協会」の復興を図る

明治44(1911)年、桂太郎や青木周蔵らによって創立された「日独協会」(総裁：久邇宮邦彦王殿下)は、日独両国民の親密な交際や両国間の学術交換、研究等を目的として、ドイツ協会学校内に事務所を置き活動していましたが、大正3(1914)年勃発の第一次世界大戦により日独交戦の状態に入ると、協会は一時ドイツ人会員をすべて失い、有名無実の存在となってしまいました。

それから10年余り経った大正15(1926)年3月、後藤新平は、親密な交流のあった駐日ドイツ大使ゾルフや入沢達吉医学博士、ベルリン大卒の森孝三らとともに協会の復興を図りました。同年10月、朝野の名士約300名に京浜在住のドイツ人有力者約80名を加え、久邇宮殿下を総裁に仰ぎ、後藤は会頭として協会を再生させました。翌年には後藤を中心として「日独文化協会」も発足し、日独文化の協調及び相互普及を図ることを目的に活動が進められました。2つの協会は昭和20年まで存続し、現在は、戦後新しく組織された公益財団法人日独協会が旧協会の事業を継承し活動を続けています。(苜)



駐日ドイツ大使ヴィルヘルム・ゾルフと後藤新平

(参考：鶴見祐輔『(決定版) 正伝 後藤新平』第八巻藤原書店発行ほか)